

持続可能な社会の探究Ⅰ 言語に依存しない情報発信

芸術科（美術）吉村雅利

1. はじめに

本講座は、造形的または視覚的な情報について研究し研究成果を発信するという意図で作った講座である。しかし「造形」や「視覚」という言葉で美術的な方向に誘導することを避け、幅広いテーマ設定を可能にして総合的な学習の機会となるよう配慮した結果「言語に依存しない情報発信」という言葉を選んだ。生物の色や形の情報や解剖学的・医学的な情報、化石に残された古代の情報、絵画などの美術作品の情報など、言語化されていない情報（言語に依存しない情報）を研究対象とし、その対象に埋もれた真理や関係性の情報を掘り出し、隠れていた情報を展示物や映像や論文などとして表し、見える形や言葉に翻訳し伝えること（情報発信）の探究を目指して設けた講座であった。自由度が高いと、低い方へと流れるのは水のごとくして上に汲み上げるのは容易ではない。

2. 内容と目的

探究Ⅰの学習としては、協働力を培い判断力やコミュニケーション力を高めグローバルな表現力を磨くことにも配慮をしグループワークを行ってきた。それによって生徒の関係が深まり探究意欲も高まることで探究成果の質的向上に繋がるであろうと皮算用をして指導してきたが、4年間の本講座での論文や発表内容にはグループワークに由来する成果は見られない。グループに参加することで知らなかった問題を知り関心を持つきっかけになることはある。一人だと口頭発表に億劫であっても、グループの一員としての発表であればメンバーに背中を押され発表の場に踏み出す事ができるという場合もある。それらはグループワークの経験によって、グループの中での振る舞い方を学び身につけた成果と考えられる。単独活動では脱落してしまいそうな生徒がグループに属することで他のメンバーに手を引かれて救われることもあり、グループワークの活動を通してリーダーシップを高める生徒も見られ、発表時のプレゼンも経験を重ねることで上達していることは確かである。しかし自ら設定したテーマについて仮説を立てて検証するような探究は、ほとんどできていない。そもそもテーマが漠然とし大きすぎて焦点が定まっていないことが多い。何を問題とし解決をめざすのかという問題意識や研究の方向性も定まらぬままスケジュールにあわせてテーマを決めフィールドワーク先を決めねばならないという時間的な問題もあるが、グループで相談することによって本当に価値のある研究テーマは却下されてしまうことがある。マニアックなテーマは、それを知らない他のメンバーの興味を引くことは難しく、グループは多数決によって話題性が高く耳障りの良い平凡なテーマへと流されてしまうが、そのようなテーマは一見面白そうに思えても、研究者も多く高校生が探究で割り

込める余地などほとんど残されていない。フィールドワークで企業や研究者の活動を調べ訪問して話を聞いても、その体験を紹介するだけで終わってしまう。本に書かれている情報やインターネット上の情報も取り出して並べただけでは素材に過ぎない。フィールドワークと情報収集だけで活動を終えることもあるが、フィールドワークや情報収集は探究のプロセスの一つにすぎない。それを授業で経験できたことが、本人の人生上の有意義な体験として価値のあるものかもしれないが、グループワークもフィールドワークも探究の主目的ではない。活動を通して得た情報が適切に調理され、自分の研究上の仮説を裏付ける根拠として活用されてこそ探究といえるものになり、その情報を取り出したことに意義が認められると考えている。

3. 探究授業の問題と反省

テーマ決定で迷走してしまうのは、テーマに限定のない本講座だけの問題であるかもしれない。他の講座では講座名で探究内容が限定され、講座選択者はそれに関心の高い生徒が集まっているので、テーマ設定で意見が割れても研究対象は講座の大テーマから逸脱できないという制限があるのでグループワークは行いやすいかもしれない。しかし本講座は研究テーマが自由なので、「視覚聴覚障がい」「自転車社会」「身体運動」「3D プリンター」「絵画の女性像」「風神雷神図屏風」など、興味関心は様々な方向に分かれる。探究内容でグループができるより、親しいメンバーが集まってグループを作り、その後に相談してテーマを考え直すことが多かった。問題点や仮説や検証を意識してテーマを決めてくれれば良いのだが、テーマを決めてから問題点を探すという流れになることも多く、後になって授業で探究するには無理があるテーマだったと気づくことになる。テーマ設定については、必要に応じて様々な情報提供をし、無理のない方向へ修正するよう促してきたが、なかなか思うように伝わらなかった。高校2年生に対して要求する内容が難しすぎるのだろうかと考えたが、やさしい言葉に置き換えても同じであった。言葉が聞こえていないわけでも、その意味が理解できないわけでもない。どうすれば伝わるのかと授業の中で4年間試行錯誤を繰り返してきたが、効果は無く何も改善できなかった。この結果から推測できる答えは、教員が期待するような有意義な研究や論文作成を目指すことは、そのグループの眼中になかったということである。論理的な説明で説得することができなかったのは、論理を理解しても論理を優先することや、研究の意義の有無が重要という意識がなく、テーマが好きか嫌いかという感情を優先して決めていたということである。メンバーの一人が良いテーマと探究意欲を持っていても、強いリーダーシップが無ければ他のメンバーを説得できない。話し合いの結果は、簡単そう楽しそうと思える安易なテーマに流れ着き、それについて分業して調べ、分業して文章にまとめたがる。一人でも可能な分量を複数人で分担することで最小限の労力で授業の課題を済ませることを最優先して追求したという点では、合理的で省エネ意識は高いと評価すべきだったのかもしれない。